

II・思春期のそとちを支える

# 発達障害からみた今日の 思春期・青年期発達

はじめに

今日、発達障害と呼ばれる子どもたちが思春期・青年期に達した時、様々な精神病理現象を呈することはよく知られるようになった。その際、筆者が常々疑問に思っていることの一つは、この時期に出現する精神病理現象に限って二次障害として取り上げられることが多いことである。ここで二次障害と称されているのは、この時期の精神病理には心理社会的要因が大きく関与していると考えられるからだというわけである。それに比して一次障害とは乳幼児期に出現する病態で、それは脳障害との関連性が高いとの仮説に基づいていると思われる。このような考え方が生まれる背景要因のひとつには、乳幼児期の子ども

## 小林隆児

西南学院大学人間科学部

もたちの生き様がいまだによく把握されていないことによるところが大きい。なぜ乳幼児期に子どもたちが発達障害とみなされる様々な病態を呈するようになるのか。その成り立ちを理解するためには、子どもたちの生活のありようをつぶさに観察することが不可欠である。そのためには、子どもと養育者との関わり合いを丁寧な目でみていくことが必要になる。生誕直後の「ヒト」が人間らしい「人」になっていく過程は、子どもと養育者との濃密な関わり合いを不可欠としているからである。

早期診断をめぐる研究は少なくないが、なぜか子どもの行動特徴のみを抽出するような調査研究が大半を占めている。母原病の再来

の誹りを恐れてか、親子関係そのものを丁寧に観察するという作業は極力回避されている。しかし、その一方では妊産婦の精神保健領域において産後うつが乳幼児の精神発達に及ぼす深刻な影響が取り沙汰され、虐待臨床では母子関係を問題にすることが常識化している。

これまでの筆者の母子臨床の経験を踏まえれば、これらの研究によってもたらされている知見は、すべて発達障害の精神病理の成り立ちを考える上で、統一的に検討されるべきものである。筆者がMIU（母子ユニット）で治療的関与をもった乳幼児期の事例の中には、産後うつや虐待（ネグレクト）を含む不適切な関わり）が関与しているものが少なからず存在していたが、それらの大半がMIUで出会うまで自閉症ないし発達障害として遇されていた。筆者がこのことに気づくことができたのは、母子関係そのものに着目したことによるところが大きい。とりわけ筆者にとって重要な気付きとなったのは、乳幼児期早期の段階で発達障害ないし自閉症スペクトラムに特有な病態とされる様々な行動特徴が、母子関係の中で生起する現象であることを確認できたことである。

このように考えていくと、本稿の主題である発達障害の人々にとつての思春期・青年期

発達にまつわる精神病理現象は、この時期に突然出現するようなものではないことがわかる。乳幼児期早期に子どもたちが親子の関わり合いの中でどのような体験を蓄積しているのかを考えていくことによって、一元的に理解することが可能ではないか。関係を軸に幼少期からの発達過程の中で精神病理現象の成り立ちを理解していこうとする視点が必要ではないかということである。

次いで検討する必要があるのは、それまでさほど取り沙汰されなかったにもかかわらず、思春期・青年期になってはじめて適応上の問題が浮上し、彼らを発達障害という枠組みで理解しようとする動きが盛んになっていることについてである。彼らの問題を理解しようとする際、それまでの発達経過を振り返ってみることが必要なことは当然としても、ただ生育歴の中から社会性の発達の問題を思わせるデータを収集すれば発達障害として捉えればよいといった単純なものではない。現在の適応上の問題が彼らの発達歴とどのような関係にあるのか、そのことを検討することによってはじめて発達障害として理解することの積極的な意味を見出すことができるからである。

以上の二点、つまり幼少期からの延長線上の問題として思春期・青年期を捉えてみてい

こうとする視点とともに、思春期・青年期にはじめて浮上する対人関係上の問題を通して、両者に通底するものは何かを考えてみることが大切だということである。

### 幼児期からの延長で思春期に 浮上してくる問題

#### (1) 発達障害といわれる子どもたちの行動の背景あるもの

MIUで筆者が観察してきた子どもたちは、すべて母子関係に深刻な問題を抱えていたが、それはアタッチメント形成をめぐる問題であった。筆者はアタッチメント形成にまつわる問題を「甘え」という視点から検討してきたが、そこで筆者は、すべての事例に共通する中核的問題は、「甘え」をめぐるアンビヴァレンス、すなわち「甘えたくても甘えられない」という心理状態にあることだと考えた。

#### (2) アンビヴァレンスに基づく不安と緊張にどう対処するか

このような心理状態にある子どもは、孤立した心細い状態にありながらもなぜか母親に甘えることが困難であるため、常に不安と緊張の高い状態に置かれている。そのような状

態にあつて、彼らが示す様々な反応を見ていくと、加齢とともにその様相は大きく変化していくことがわかる（小林・佐川、二〇一二、佐川・小林、二〇一二）。

乳児期では、母親があやそうとすると目を逸らし、抱きかかえようとするのけぞるなどのわかりやすい反応でもって母親との関わりを回避することが多い。さらには甘えられない欲求不満からかんしゃくを起こしたり、睡眠がうまくとれなかったりする。しかし、幼児期になると、子どもたちは目の前にいる母親に対して素直に甘えられないことから、強い不安と緊張を少しでも緩和したり、紛らわすための対処法を彼らなりに試みるようになる。

筆者の観察データによれば、一歳台においては、母親と離れていると相手を求めるが、いざ関わり合おうとすると回避的反応をするという「関係からみたアンビヴァレンス」が顕著に示されることが少なくない。しかし、二歳台に入ると、俄然彼らの反応行動は複雑な様相を呈するようになる。たとえば、ひとりで同じ遊びを繰り返すことで不安と緊張を和らげようとする。あるいは母親からの働きかけを回避するようにして常に一定の距離をとって動き回る。子どもだけを見れば多動とみなされようが、関係からみれば母親からの

接近に対する回避的反應であることがわかる。子どもによつては、心細いにもかかわらず、母親の前では楽しそうに振る舞い、不安な思いを極力表に出さないようにするなど、母子の組み合わせによつて多様な反應を示すようになる。三歳台以降になると、ことさら相手の嫌がることをすることによつて相手の関心を引こうとする。「挑発的行動」の萌芽である。さらには独語や自閉の世界への没入といった精神病的反應といった深刻な精神病理現象を示すまでになることがある。

### (3) 關係の悪循環によつて対外行動はより病理的な色彩を帯びる

ここで大切な視点は、「甘え」のアンビヴァレンスを強く孕んだ母子關係にあつて、母親が子どもの「甘え」を感じ取ることができなければ、自ずから關係の悪循環が生まれ、子どもたちの行動はさらに複雑な様相を呈するようになるということである。たとえば、繰り返し行動が母親によつて否定的に受け止められると、より一層こつした行動にしがみつこうとする。その結果、強迫的色彩を帯びることになる。多動な子どもは葛藤が強まれば、乱暴で攻撃的な色彩を帯びる。つまり、発達障害にみられる深刻な行動障害の多くは關係障害とその悪循環の中で生成するという

ことである。

### 学童期から思春期に入ること で浮上してくる問題

#### (1) 母子間の心理的緊張の高まりからくる心理的混乱

小学校高学年の前思春期に入ると、第二次成長を間近に控え、心理的に落ち着かない状態に入る。子どもたちにとつてこの時期は自分の足元が揺れるような心もとない気持ちになる。そのような不安は子どもたち仲間のあいだで解消されることも多いが、発達障害の子どもたちでは交友關係を持ちにくいこともあつて、どうしても母子關係に依存しがちになる。思春期を前にした子どもの心身の変化は母親にもさらなる不安をもたらす、そのことが母子間により一層の心理的緊張を生む。子どもは依存と自立をめぐつて強いアンビヴァレンスが生じてくる。乳幼児期から子どもたちには「甘え」をめぐるアンビヴァレンスが強いことから、この時期までに母子關係が修復されていない時には、さらなる情緒的混乱をもたらすことになる。その結果、乳幼児期に示した行動上の問題がより一層先鋭化する。深刻な行動障害の出現である。

この時期は幼少期とともに母子關係に積極

的に介入する必要性の高い、予後を左右するほどに重要な時期である。なぜなら子どもは母親との間で「甘え」の感情が高まるため、母子關係修復の好機として捉えることもできるからである。ここで一例を取り上げてみよう。

K男：初診時一二歳（小学六年）、普通學級に在籍し、特別支援情緒學級にも通つてゐる

子どもが落ち着かないということでの受診であつた。会話は自分のペースで語ることが多く、周囲に対して挑戦的な態度が目立つところがあつた。今一番の興味の対象は力士のプロフィールであつた。面接ではつきつきに好きな力士の出身地や所属の部屋などを得意げにしゃべりまくつてゐた。筆者は彼の話に分け入ることができずにいたが、このような彼の話し方は、相手との間に一定の距離を保ち、相手から話しかけられないように、自分を保つてゐるためではないかと感じられた。時折筆者は意図的にスキンシップをとろうとして彼の身体に触れてみると、急に身体を固くして思わず身を引く反應を見せた。そこに彼の警戒心の強さが感じられた。筆者は母親に彼のこのような警戒的な構えがなぜ生まれたのかを「甘え」の問題から説明していくと、母親はいたく共感し、実は自分も一人っ

子で、いつも実母から監視されるように事細かく注意されていたことが語られ始めた。今年実母が亡くなったが、悲しみと同時にほっとしたところもあることを吐露するのであった。そして、自分も気をつけてはいたが、結果的には実母と同じように子どもに接していたのではないかと内省的に語るまでになった。母親が実母からいつも監視されているように感じていた背景には、「甘え」によってもたらされる安心感がなかったからであろうことはいうまでもない。

その後、月一回の面接を重ねていたが、その間母親から幼少期の生育歴を聞いては当時を振り返る面接が続いた。数ヵ月後、彼も中学一年になった。初診から一〇ヵ月も経過した頃、母親が今一番困っていることは、母親が何を尋ねてもR男ははぐらかすことが多いとのことであった。内容を聞いてみると、闇雲に何でもはぐらかしているのではなく、自分に自信のある内容であれば答えているようで、はぐらかすのは答えに自信のない時が多いことがわかった。さらには試験の成績をいなく気にするようになり、試験の前だから通級教室は休みたいと彼が言うので、成績はあまり気にしなくてよいと母親が言ったところ、彼はひどく反撥したという。彼が学業成績をこれほどまでに気にしていることにいた

く驚かされたというのである。そこで筆者は母親の日頃の態度がとても生真面目で優等生的だから、彼はそうした母親の背中を見て感じ取っているのではないかと筆者の感じたことを伝えた。すると、母親はとてもよくわかったと頷くとともに、彼が時間をとても気にして神経質なところも自分に似たのではないかと、親子がこれまでいかに影響を及ぼしてきたのか、改めて感慨に耽つている様子であった。まもなく筆者はある身近な例として、「甘え」の問題が世代を超えて母子間に伝わることもあると具体的に解説すると、例に挙げた母親の姿と自分とがあまりにも酷似していることに大変共感を示した。自分の幼少期、実母がアパートの管理人の仕事をしていたので、四六時中自由な時間が持てず、自分もほとんどどこにも連れて行ってもらうことがなかった。とても厳しいしつけを受け、幼少期には物置に閉じ込められ、庭の木に身体を縛り付けられるということもあった。近所の人が見るに見かねて実母に話してくれて助けられたこともあった。実母は覚えていないが、自分の記憶には強く焼き付いている。そんな実母を思い出して、自分もこの子に対して身を削るようにして子どもに尽くすようなことはしてこなかった。子どもが泣くといういらして、自分の時間が取られるのがとて

もつらく、嫌だったと述懐するのである。子どもに対してどこかクールなところがあったと思うとも振り返るのであった。このようにして母親自身のみずから生い立ちを振り返り、自分の実母に抱いていた思いが、今の子どものもそれとどこかで重なっていることに気づくのであった。それまで筆者は、母親のどこか淡白で割り切つてはつきりした、角ばつた物言いが気になつていたが、次回にはそれが消えて、丸みを帯びて優しさを感じさせる物言いへと変化していた。すると次のような話が母親から語られ始めた。先日、母親が外出しようとしたら「お母さん、行ってらっしゃい。気をつけてね」と驚くほどに思いやりのあることばを言つて送り出してくれたという。思わず母親は「ありがとう。心配してくれるんだね」と礼を言つて応えたという。さらには友達がひとりりで遠くに遊びに行つていくことを知つて、自分も行きたいと言いつた。母親としてはひとりで行かせるのは心配であったが、彼自身が「お母さん」と行くのは恥ずかしい。中学生だから」と言うので、ひとりで行かせたところ、公共交通機関を乗り継いで無事行つてきた。親子ともども嬉しかったというのである。

このように母親自身が過去の自分自身の親子関係を内省する中で、自分の中にくすぶつ

ていた「甘え」にまつわる思いを懐古することによって、母親のどこか肩に力が入っていたところが抜けたのであろう。子どもも母親に対して感じていた緊張が緩んだのではないかと思われた。そのことによって、母子双方の間で親密感、すなわち本来の「甘え」の感情が生まれたのではないかと思われるのである。それが証拠に、次回には母親が「最近は息子と一緒にいてもイライラしなくなった。以前は四六時中息子を見張っている感じで、人前で迷惑をかけたくないという思いが強く、結果的に息子を押しさえ込もうとしていたと思う」と、しみじみと語るのだった。その後一年経つが、親子は平穏な日々を過ごしている。

## ② 自己意識の高まりからくる心理的混乱

周囲の子どもたちと比べることによって見えてくる自分という存在についての疑問がこの時期になると高まってくる。自分がなぜ発達障害と言われるのか、他の子どもたちと自分がどのように違うのか、次々と生まれてくる疑問に対して容易に解決の道が探れない。そのことから生じてくる混乱は彼らにとって深刻なものとなっていく。筆者が以前、注意欠陥多動性障害（ADHD）の残造型と診断して治療した印象深い例を取り上げてみよう

う（小林、一九九九）。

Y男・初診時一五歳、中学三年、普通学級在籍

母親によれば、落ち着きがない、何事にも被害的に受け止めやすく、時折呆然としていることがあるということが主たる問題であった。知的水準に明確な遅れはなかったものの、学習能力に大きなアンバランスがあった。発達歴を聞いていくうちに、歩き始めると落ち着きのなさが目立ち、学童期に入ってから多動は改善したものの、注意散漫がずっと残存していた。自分をはっきり主張することはなく、祖父母と両親に囲まれていつも大人から（特に祖母から）ああしろこうしろとせかされ続けた。

数回の面接でY男の苦しみは以下のようなものであることが分かってきた。もともと深刻な悩みは、自分で自分をコントロールできないというものであった。たとえば、友達から誘われるとつい同調してしまう。友達から誘われるのは嬉しくもあるが実際は楽しくない。自分の本心からやりたいと思つて行動することはなく、友達から誘われてついやってしまうことが多いのである。

Y男の悩みの中心は、何事も自分から主体的に物事を遂行することができないというも

のである。かなり深刻な自己意識の問題である。さらに日頃から、いつもびくびくしていて、何か行動してもすぐに「ごめんさい」と言ってしまう。謝らなくてもよい場面でもついこのような冒動をとってしまうというのである。そのようなことを語っているY男の話の方に耳を傾けていた筆者は、Y男がいつもせかせかした感じで早口に話しているのを感じ取り、そのことをY男に伝えた。Y男はすぐに頷き、自分はいつもせかされたような感じにいるというのであった。面接でそのことを指摘されることでY男はかえって安心したのか、面接を終えての帰りに、車中でY男は母親によくしゃべるようになった。その後、Y男は自分のことをどんどん主張するようになり、母親にもこれまでにないほどに言いたいことを言うようになってきたというのである。

次回の面接でY男は自分の気持ちをどんどんしゃべりまくるようになった。話したいことがつきつきに吹き出してくるのではないかと思われるほどであった。そばで聞いていた母親はこれまでと同じように早いテンポでY男に回答しているのを聞いていた筆者は、母親のこのような話し方がおそらく彼にとっては自分が非難されるような侵入的な響きを感じさせているのではないかと思った。そこで、

筆者は母親に次のように助言した。Y男の話し相手をする時、意識的にゆっくりと応答してみるようにと。母親は筆者の意図を察知し、すぐに実行した。すると次第に二人のコミュニケーションが深まっていくのがわかった。

その後、母親もこれまでの養育体験を振り返る中で、次第にY男への対応にも暖かさやゆとりが感じられるようになっていった。するとY男は面接場面でおどして母親の顔色をうかがうような態度が消え、筆者のほうを見据えて自信をもって話をするようになっていった。

三週間も経過すると、Y男の話し方にはせき立てられるような感じがなくなり、自分の意見を堂々と主張できるほどの変わりようを見せた。そばで見ている母親もとても満足そうに見守っていた。家庭で母親が尋ねなくても、自分の意見をはっきりと言うようになったという。すると吃音もうそのように消失した。初診から三ヵ月後、治療は終了した。

幼少期、落ち着きがなく、「甘えたくても甘えられない」状態にあったY男は、常に親の顔色をうかがうようにして振る舞い、安心して自分を主張することができないまま、今日に至っていることが考えられる。幸いこの事例では、母親の気づきによって、母子関係

にみられた悪循環を断つことができた結果、子どもの主体性を育むことが可能になった。

### 性にまつわる心理的混乱

子どもから若者へ成長し、大人としての人格の統合がなされていく過渡期としての思春期・青年期発達が、発達障害といわれる子どもたちにとって多難な時期であることは想像に難くないが、とりわけ社会性の発達に深刻な問題をもつ自閉症スペクトラムの子どもたちの場合、「性」をめぐる深刻な様相を呈することが少なくない(小林、一九九一)。

(1) 第二次性徴に伴う身体の変化をめぐる混乱  
彼らにとつて、第二次性徴に伴う身体の変化によつて引き起こされる心理的混乱は大きなものがある。自分の不安を誰かに語り合うことで解消するということが困難な彼らは多くの場合、そうした変化を認めがたいものである。

非常に印象的な事例であったが、一六歳のある男子は、ベニスに生えてきた恥毛を一本一本抜いては便座の周囲に丁寧に並べていた。その一方では女性の衣類を身につけ、母親の身体を露骨に触るなど、異性へ関心が強まっていた。その背景には父親の養育への関

与がほとんどなく、兄弟仲も悪く、男性性に対する否定的な思いが強かったことが大きく関係していた。

女性の場合、第二次性徴は初潮と乳房の膨らみというより明瞭な形で出現する。同性の母親の関与もあって、さほどの混乱を示すことは少ないように思う。しかし、プライドや自我理想があまりにも高かったがために、胸の膨らみが友人に遅れをとったことが引き金となって、大きな情緒的混乱を来し、ついには妄想へと進展した高校生女子がいた。母親自身も万能的な実母との間で「甘え」を享受できず、強い自我理想をもち続け、思春期には摂食障害を発症していた。「甘え」の問題が世代を超えて伝達していることが明らかになった事例である。

(2) 男らしさ、女らしさを身につけることをめぐる混乱

男らしさや女らしさを獲得することも彼らにとつてなかなか困難な課題である。一般的には同性の親子関係やその後の学童期の子ども同士の関係を通して次第に身につけていくものであるが、彼らの場合にはそのような自然な経過をとりにくく、極端なかたまりやすい。一歳のある男の子は幼少期から父親との関係が悪く、男性の大人を極力忌

避していた。そうした傾向が学童期にも続き、男児の中には入ることができず、女兒とばかり交流をもっていた。彼は次第に女兒の使うことばや仕草を取り入れていった。最初は女兒も相手をしていたが、高学年になると次第に女兒から気持ち悪がられて避けられるようになった。

### (3) 性衝動の亢進によって起る混乱

性衝動が亢進することによって性欲が高まることは、彼らにも大きな混乱をもたらすが、それ以上に周囲との関係に波紋を広げることになる。ある男の子は小学校高学年になった頃から母親に対して身体接触が増えるとともに、激しいことばで反撥的態度をとるといったアンビヴァレンスが非常に強まっていた。中学生になると、自分の異性への関心を否認するような態度をとる一方で、冷蔵庫からソーセージを取り出し、ティッシュペーパーで巻いて両手で握り、寝転がって力むという自慰行為を象徴するような行動が出現した。性衝動の亢進と性に対する否定的な思いがこのような行動に駆り立てているのであるが、彼らなりの涙ぐましい努力でもある。

### (4) 異性への関心が高まることによる混乱

思春期・青年期においては性愛対象として

異性とどのような関係を築き上げていくかがその後の成人期を迎えるにあたっての重要な課題となる。当然のごとく、彼らにも異性への関心は生まれてくるが、対人回避傾向の強い彼らにとって、異性への関心はこれまでの対人関係にも増して強い忌避感情を引き起こす。幼少期の「甘え」体験は、受け身的に相手からの愛情を受けることにあるが、思春期・青年期においては、相手である異性との間で建設的な関係をもち、そこで双方間の性的感情を育まなければならぬ。幼少期のような母親を当てにすることでは性的関係は生まれぬ。あまりにも高いハードルである。そこで勢い彼らは異性への関心を極力回避するという対処行動をとることになる。

ある男の子は、幼少期からテレビへの関心が強く、さかんにチャンネルを弄っていたが、中学生になった頃に、寝室で自慰をしているところを母親に見えられてから、「ペニスに」触つたらいけません」とみずから言い聞かせながらも自慰をするようになった。異性への関心が強まると、TVのニュース番組で好きな女性キャスターが話す時だけわざわざ音量を下げ、男性キャスターが話す時には音量を元に戻すということをしようになった。困惑して監視を強める母親の思いも関係

して、自慰に対する罪意識とともに、異性への関心をも否認する行動を取るようになったが、その背景にはこの子の出産をめぐる不幸な出来事があり、その時の後悔を今なお引きずっていることがわかった。母の悲哀が面接で語られたことで少しづつ母の悲しみが癒され、母子間の心理的距離が生まれ、彼も学校の寮生活を送ることができるようになった。

中学校（普通学級）に入ってから、急に性的問題行動が出現してきたある男児では、女性の更衣室を覗いたり、不意に女性に接近したり、廊下でわざと足を出して転ばせたりして女性に関わりをも持とうとするようになった。彼は小学校高学年から集団生活や学業に対する不適応状態となっていた。さらに父親は不在がちで、母親ひとりで心理的負担も重く、そのため母子間にも不安と緊張の強い生活が続いていたことが背景になった。

ある男子大学生では、往来で目の前を素敵な女性を通り過ぎようとする、不自然なまに視線を逸らして歩いていた。しかし、その一方で大学生活では女子学生に対して挑発するようにしてわざと足を出して転ばせようとする行動をとって問題となっていた。

彼らにとって異性への関心が高まることは非常に強い不安と緊張を引き起こすのである。挑発的行動はそのための屈折した表現で

はなかるうかと思う。

### 思春期・青年期に入つて はじめて浮上してくる問題

発達障害の子どもたちの思春期・青年期発達を、幼少期から連続的に捉えてゆくと、その心理的な混乱の成り立ちを理解することは比較的容易である。それに比して、高校生や大学生となつて初めて行動上の問題が顕在化する場合、それまでの発達歴を十分に把握することが困難なことも少なくないため、発達障害という視点で問題の成り立ちを理解していくことはさほど容易ではない。大学生になつて初めて発達障害という目でみられるようになる学生の問題の大半は、対人関係に関連するものである。われわれ臨床家に求められるのは、対人関係の核心にある問題が何かを

見極め、その対応を考えることである。筆者が以前学生相談で出会つたある女子学生を取り上げてみよう。匿名性を保つために詳細は省略し、ここでは面接での印象的な場面のみを取り上げる。

#### ○子・大学四年

ある文系の学部の学生で就職活動に忙しい時期での相談であつた。小学生の頃、ADHDだと言われて薬を一時的に服用していたという。自分のことがよくつかめないというのが主な悩みであつた。将来何をしたいのか、何ができそうなのか、わからなくて困っている様子であつた。話を聞いていく中で、近々下宿を引き払つて実家に戻りたい、母親のことが心配だからというのである。そこで家庭の事情を聞いてみると、とくに経済的な問題があるわけではないが、母親が父親に拘束さ

れて自由がないのがかわいそうだという。両親の関係は頻繁にけんかをするほど険悪で、家庭が落ち着かない事情も浮かび上がつてきた。その中で筆者が首をかしげたのは、彼女が母親に対してひどく揺れる思いを抱いていることであつた。母親についてとても同情的に語るかと思うと、昼寝をするほど薬をしていゝなどと非難めいたことも語るのである。筆者は彼女が心理的緊張のいまだ強い家庭にこの時期わざわざ戻ろうとするこの真意が掴めなかつた。

筆者は彼女が今後の進路に迷っていることを取り上げ、何をしても行き当たりばつたりになるんだね」と指摘すると、「気づいたらもう（就活の）面接の朝になつていゝような感じで、計画性がないんです」と答えたので、筆者は「お母さんといろいろとやり合うようだけど、お母さんに随分同情もしている

# プレイセラピーへの 手びき

関係の綾をどう読みとるか

田中千穂子

著 ● 東京大学大学院教育学研究科教授

セラピーのなかで何を読みとり、プレイの中でどう返してゆけばよいのか。「専門的な経験に裏づけられた勘を磨くために、プレイセラピーの機微を、ていねいに解説。」



■ 1780円(税込) / 四六判 ISBN 978-4-535-60426-5

日本評論社

〒170-8474 東京都豊島区南大塚3-12-4  
TEL:03-3987-8621 <http://www.nippyo.co.jp/>



よね」と尋ねると、「私もよくわからないけど、子どもみたいな人。ムキになるところがある。幼い人」と批判的なことを言う。そこで筆者は「お母さんは子どもっぽいんだ」と彼女の話と同調して応じると、今度は「でもできることはできるんで。料理とかは」と反論するように肯定的に返すのである。

こうして筆者に見えてきたのは、母に対して否定的で怒りさえ感じさせる内容まで話していたかと思いい、筆者がそのことに同調して応じると、途端に肯定的な内容で返すというコミュニケーションの特徴である。ここに筆者は幼少期の発達障害の子どもが母親への「甘え」に対してとっている関係の特徴、つまり「アンビヴァレンス」としての「天の邪鬼」心性を見て取ることができると思われるのである（小林、二〇二二）。母親との間で肯定的な「甘え」体験もなく、常に母親の顔色をうかがいながら振る舞ってきた子どもの姿が重なって見える。自分の気持ちを感じ取って映し返してくれる人が不在のままに今日まで来たのであろうと思われたのである。彼女は今の自分がADHDだからこうなつたと理解しようとしているが、筆者からみれば、それは発達障害としてのADHD、つまり脳障害を起因としたものではなく、母子関係を中心とした幼少期の体験に端を発した根深い

問題を意味していると思われる。

おわりに

これまでを振り返ってみると、発達障害といわれる子どもたちが社会性の発達に大きな問題を抱えつつも、彼らなりに自分の不安に対処しながら懸命に生きようとしていることがわかる。思春期・青年期発達の中心的課題は「性」にまつわるものである。人間にとつての思春期・青年期発達は、「生物学的な性」が心理社会的発達によって人間らしい「性的なもの」へと変容していく過程として見ることができると、そのように考えると、社会性の発達に深刻な困難を抱える発達障害の子どもたちにとつて思春期・青年期発達がハードルの高いものであることは当然といえよう。しかし、彼らに認められる多様な精神病理現象の多くが、彼らなりの不安と緊張への対処行動であることを考えると、その行動の背景に働くところの動きに照準を合わせた対応が求められることがわかる。思春期・青年期発達が大変な課題であるのは発達障害と呼ばれる人たちだけではないはずである。

本稿で筆者が述べたかったことは、幼少期の「甘え」体験の質的問題がその後の学童期から思春期・青年期、さらには成人期に至るまでの過程を通底しているということであ

る。それは「関係」の問題としてわれわれとの間で顕在化したり、時には潜在化したりしながらも世代を超えて脈々と息づいていくものである。「発達障害」問題は他人事ではないのだということを肝に銘じる必要がある。

〔文獻〕

小林隆児「青年期自閉症の精神性的発達について」『児童青年精神医学とその近接領域』三三巻三号、二〇五―二一七頁、一九九一年

小林隆児「注意欠陥多動障害を有する子どもの事例を通して」(平田一成監修)『療育技法マニュアル第十三集 思春期の子どもと家族―臨床事例から考える』八二―九二頁、財団法人神奈川県児童医療福祉財団、一九九九年

小林隆児「親子面接、子ども面接、そして親面接―関係病理としての『天の邪鬼』に焦点を当てて」『そたちの科学』一九号、三五―三九頁、二〇二二年  
小林隆児・佐川眞太郎「新奇場面法(SSP)からみた甘えのアンビヴァレンスの諸相(その1:一歳台の乳幼児を対象に)」『第二二回日本乳幼児医学・心理学会発表』二〇二二年一月一七日

佐川眞太郎・小林隆児「新奇場面法(SSP)からみた甘えのアンビヴァレンスの諸相(その2:二歳台の幼児を対象に)」『第二二回日本乳幼児医学・心理学会発表』二〇二二年一月一七日